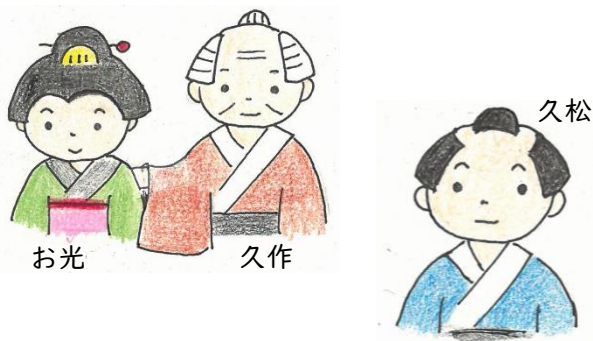


二つの物語のあらすじ

「新版歌祭文」から“野崎村の段”

「興甫歌（フンボガ）」

- 1 奉公先の油屋(大坂)から実家に帰らされてしまった久松。実家の父久作は、これを機会にお光と久松との婚礼を進める。しかし、久松は、お染(油屋の娘)と恋人同士だった。



- 2 久松を好きだったお光はウキウキが止まらない。しかし、お光と久松の婚礼の日、大坂からお染が訪ねてくる。お染は、嘘をついて家を出てきてしまっていたのだった。



- 3 久松はお染と話し合い、叶わぬ恋ならば、いっそ心中しよう二人は嘆く。二人の決意を察した久作は、心中を必死に止めるよう説得した。



- 4 そこに婚礼の支度が整ったお光が現れるが、綿帽子を取ると、髪を切り、尼姿になっていた。お光は、二人を救うために自分が身を引いて出家する覚悟を決めた。久松とお染は、悲しみの中、大坂の油屋へと戻った。



- 1 貧しいが心の優しい弟のフンボは、ケガをしたツバメを助けて看病してあげた。春になり、そのツバメが種をくわえて戻ってきた。フンボは、その種をまいた。



- 2 種はどんどん成長し、大きなひょうたんができた。フンボと奥さんがひょうたんを切ると、中からたくさんのお米や宝物が出てきた。



- 3 それを見ていた意地悪な兄のノルボは、わざとツバメにケガを負わせて看病した。春になり、そのツバメが種をくわえて戻ってきた。ノルボは、その種をまいた。



- 4 種はどんどん成長し、大きなひょうたんができた。ノルボが「待ってました」とひょうたんを切ると、中からたくさんの虫や化け物が出てきた。

